

保育の専門性をいかした子育て支援 — 日常の保育実践に着目して —

砥上 あゆみ

Child-rearing support using childcare expertise — Focusing on everyday childcare practice —

by
Ayumi TOGAMI

1. 問題意識と研究目的

保育所における子育て支援は、2008年に改訂された「保育所保育指針」において「保育所における保護者支援は、保育士等の重要な業務であり、その専門性をいかした子育て支援は、特に重要なものである」¹⁾と明記されている。しかし、保育所における子育て支援業務は、その重要性や緊急性が叫ばれながらも、これまで保育の現場で蓄積されてきた実践知が整理されていないこと²⁾が課題として指摘されて以降、保育者の保護者への支援に関する研究から保育の専門性をいかした固有の援助技術が明らかにされている³⁾。また、保育者と保護者の関係構築に着目し、子どもと保育者の関係性の深まりが親子関係の変化につながっていくこと⁴⁾や保護者の子ども理解が深まること⁵⁾が示されている。このような支援のはじまりには、子どもの不自然な泣きや抱っこされる子どもの不安定な様子等から保育者は子どもと保護者の愛着関係の希薄さを捉えていることがある。つまりこれは、保育の専門家である保育者は、日常の子どもの姿から表面化していない子育て・家庭支援のニーズに気づくことが可能であることを示唆するものである。そこで、保育者がどのような子どもの姿を問題として捉え、どのような保育、保護者への支援が行われているか、日常の保育における保育者の視点に着目する必要がある。

保育者の専門性をいかした子育て支援は、実践として積み重ねているものの、知見として整理され始めたのは最近のことであり、その支援の実質的な内容を可視化することが重要となる。諏訪（2014）⁶⁾は、子育て支援の場や方法は多岐にわたり、その多様性に保育

受理日 平成 30 年 12 月 28 日

(1) 純真短期大学こども学科 助教

分野からどう迫るかが、保育学研究の独自性であり、課題であることを指摘している。大豆生田（2013）⁷⁾は保育者がおこなう子育て支援、「保育」と「子育て支援」が制度的にはわけて位置づけられているものの、特に在園児の保育と子育て支援は不可分であり、日常の保育そのものが子育て支援であることを再認識する必要性を指摘している。保育所は、保育の専門知識・技術を有する専門施設であり、日常の保育をいかした子育て支援は保育者固有のものである。そこで、保育者が日常的かつ継続的におこなっている日常の保育が子育て支援にどのようにいかされているのかを示すことが課題となる。

2018年に改訂された「保育所保育指針」⁸⁾でも指摘されているように、様々な環境の変化により子育て家庭は多岐にわたる課題を抱えているなか、子どもの育ちを保障する保育者の役割、保育の専門性をいかした子育て支援者としての役割は重要性を増している。

以上のことから、本研究では、日常の保育実践に焦点をあて、保育者の視点や保育技術が子育て支援にどのようにいかされているのかを示すことを目的とする。

2.研究の方法

（1）調査対象と手続き

本研究では、子育て支援をテーマに2年間のグループ研修の実績（平成21～22年、平成23～24、平成26～27年）があるF市のA区、B区、C区、D区の私立保育園（102ヶ園）を対象とし、回答に対する限定が少ない自由記述式の質問紙調査を実施（平成27年6月9日～30日）した。倫理的な配慮として、個人が特定されないこと、研究以外の目的で使用しないことを文書で知らせている。質問内容は、保育の場における家庭支援の枠組み⁹⁾を参照し、問題の把握（気になる子どもの姿とその要因として考えられること）、支援の実際（子どもへの保育、保護者への支援）について調査を行う。

（2）分析方法

気になる子どもに応じて支援方法が異なることが予測されるため、保育の中で気になる子どもと捉えた子どもの姿について、内容の類似性に基づき分類を行う。記述データは、保育者の文脈を重視し、現象をリアルに記述するため、「臨床家が使ったままの言葉を使い、リアリティを高めていく方法」¹⁰⁾を参照し、以下の手順で分析を行う。まず、気になる子どもの姿の記述データをスライス化する。記述データを一覧にし、子どもの姿、その要因として考えられることに分類し、そのスライス化した具体的なデータに対してコードを割り当てる（コーディング）。さらに、データを分類し、カテゴリを作成する。カテゴリ名は【】で表記する。また、子どもへの保育（支援）、保護者に対する支援の記述データをスライス化し、上述した手順と同様に行い、保育者の保育技術を捉えていく。

以上の分析結果の項目に基づき、保育の専門性をいかした子育て支援の実際を明らかにしていく。

3.分析結果

保育者の記述データ（33 ケ園、201 名の保育者の回答）を分析した結果、気になる子どもの姿を、①子どもの養護の問題、②子どもと保育者・保護者との関係性の問題、③子どもの発達の問題、④子どもの個別の問題、⑤子どもの集団行動・他児との関係構築の問題に分類することができた。保育者が保育の中で捉えた気になる子どもの姿（表①-1）、その要因として考えられること（表①-2）、子どもへの支援方法（表①-3）、保護者への支援方法（表①-4）を表でまとめる（下線部の番号は各項目を示す）。子どもの気になる姿の要因については、①、②の項目についてのみ記述データから抽出することができた。

① 子どもの養護の問題

子どもの成長、発達の基盤となる基本的生活習慣に関わる問題として、家庭での【基本的生活が保障されていない】場合、子どもの園生活のリズムや活動への影響が顕著に現れている。そのため、保育者は保護者からの日常の情報を基に保育の中で【個に応じた関わり】を行い、家庭との生活の連続性を視野に入れ、園における生活リズムの改善に努めている。また、【不適切な養育の影響】として、子どもの不衛生な状態が原因となり他児とのトラブルに派生することもあるため、保育者は子どもの清潔を保つよう心がけるとともに年齢に応じて子ども自身の生活能力を高める保育の工夫をし、【基本的生活習慣の確立】が目指されている。このような清潔の欲求を育むための保育者の関わりは子どもの成長において大切なことである。

保護者への支援は、子どものおかれている状況を改善するために、保護者の思いを【支持】しながら様々な保護者への支援の方法が示された。生活リズムの改善に向けた【情報提供】や、不適切な養育環境を改善するための具体的な方法を【提案】をしている。また、年齢に不適切な関わりに対して、保育者は保育園での子どもの自立できている様子や子どもの気持ちを代弁し、保護者に伝え、年齢に応じた関わりについても助言している。

表①-1.保育者が捉えた気になる子どもの姿

カテゴリ	コード
【園生活の問題】	園生活に慣れない、午睡ができない、午前中いつも眠そう 昼食前に寝てしまう
【活動面の問題】	集中できない、活気がない、元気がない 落ち着いて遊べない
【食事面の問題】	過食・偏食、食事のマナーが悪い、離乳食が進まない
【排泄面の問題】	排泄を我慢する、便秘による腹痛 トイレに行こうとしない
【不適切な養育の影響】	不衛生、不衛生なことが要因となるトラブル

表①-2.その要因として考えられること

カテゴリ	コード
【基本的生活が保障されていない】	不規則な生活リズム、食生活の乱れ（朝食欠食）
【不適切な養育】	ネグレクト、身体的暴力、不衛生な環境での育児
【子どもの自立にかかる関わり】	保育園と家庭での対応の違い 年齢に不適切な関わり

表①-3. 子どもへの支援方法

カテゴリ	コード
【個に応じた関わり】	その子にあった対応をする、苦手なものを減らす おやつを量を工夫する、個別の関わりをもつ 子どもへの具体的な個別支援（基本的生活の保障）
【基本的生活習慣の確立】	園生活のリズムを整える 食事のマナーを伝える 子どもの清潔を保ち、心地よさを味わう 子どもに清潔を保つ方法を教える
【保育の中での体験の工夫】	食べる喜びを体験させる、遊びをとおした保育の工夫 自分ですることにより喜びを感じる
【子どもの背景を把握】	家庭の子どもの状況把握
【他児との関係性への配慮】	本児の気持ちをくみとる（不衛生が原因でトラブル）
【安心できる環境構成】	保育者が一緒に行く

表①-4. 保護者への支援方法

カテゴリ	コード
【情報収集】	家庭の子どもの生活の様子を把握
【情報共有】	子どもの思いを共有 家庭と保育園の子どもの様子を共有
【情報発信】	保育園での子どもの様子や変化を伝える 保育行事でクラス全体に呼びかけ
【子どもの思いを共有】	子どもの思いを代弁し、伝える
【保護者との連携・協働関係の構築】	保護者との信頼関係の構築 意識的にコミュニケーションを図る
【提案】	生活リズムの改善に向けた具体的な方法を提案

カテゴリ	コード
【支持】	保護者を褒める
【情報提供】 (子どもの基本的生活の保障にむけた)	睡眠の大切さを伝える 子どもにとって好ましいリズムを伝える
【子どもの育つ環境を理解】	子どもの背景を把握する
【親子関係を深める助言】	スキンシップのとり方を伝える
【相談を基礎とした支援】	保護者の悩みを共有
【不適切な養育環境の改善への助言】	清潔を保つための具体的な方法を伝える

②子どもと保育者・保護者との関係性の問題

【不安感を抱えている】ために、保育者に必要以上の甘える、そばを離れない子どもの姿や行動前にすべて保育者に確認する【自己決定できない】子ども、遊ぼうとしない等の【自発性の乏しさ】がある子どもの様子を捉えている。その要因として、親子関係等の人との関わりが問題の起因として捉えている。そのため、保育園内において【1対1での関わり】を増やし、まずは子どもと保育者との信頼関係を深め、子どもが安心できるように努めている。子どもの発達の基盤となる人への基本的信頼感を獲得するためには、不安な感情を受けとめてくれる保育者は子どもにとって欠かすことのできない存在となる。

保護者への支援方法においては保護者の状況や思いを理解し、【受容】、【支持】することに努めている。甘えたい感情を保護者に素直に表現できない子どもは、保育者が子どもの気持ちを代弁し、【親子関係を深めていく支援】が行われている。

表②-1. 保育者が捉えた気になる子どもの姿

カテゴリ	コード
【不安を抱えている】	必要以上に甘える、後追いが激しい 保育者に抱っこや1対1での関わりを希求 保育者のそばにいる・そばから離れない 承認欲求が強い、母親との分離困難、人見知りが激しい
【自己主張の乏しさ】	保護者への気持ちを表現できない 甘えられず、攻撃的な態度で示す
【主体性の減退】	甘えてできることもしなくなる
【自発性の乏しさ】	遊ぼうとしない、動きが乏しい
【自己決定できない】	行動前に保育者にすべて確認する
【過剰反応】	怒られると尿をもらす
【大人への不信感】	保育者と話をしない

表②-2 その要因として考えられること

カテゴリ	コード
【母親の養育態度】	忙しく、子どもを相手にしようとししない
【希薄な親子関係】	保護者の関わりが少ない

表②-3 子どもへの支援

カテゴリ	コード
【見通しをもった保育の工夫】	自信や意欲につなげる保育の工夫
【1対1での関わり】	スキンシップを増やす

表②-4 保護者への支援

カテゴリ	コード
【受容】【支持】	保護者の状況を理解する
【親子関係を深めていく支援】	具体的な助言（スキンシップのとり方）
【共通理解】	保護者の（子どもの気持ち）気持ちを代弁

③子どもの発達の問題

保育者が子どもの発達において気になる子どもの姿としては、言語や運動機能に関するものが多くあげられていた。その支援方法は、保育の中で児童文化財の活用や言葉のやりとりが活発となるような遊びを取り入れる【保育内容の工夫】をしたり、【言葉による自己理解を深める】ために、子どもの気持ちを代弁したりといった関わりの工夫がなされている。また、運動機能についても発達を促す工夫がなされている。そこに共通するのは、できないことで子どもが苦痛に感じたり、不安感を強めたりしないような配慮がなされているところである。また、【主体性を育む】ことや【保育者がモデルを提示】するなど、どのようにしたら子どもができるのかを考え、その方法の工夫が多くなされている。

保護者への支援においては、保育園の子どもと家庭の子どもと異なる場合もあり、子どもの様子を【共通理解】することが重視されている。集団生活だからこそ浮き彫りになる問題は、保護者には見えにくい姿であり、保護者理解が得られない場合もある。しかし、障がいの疑いがある場合、障がいとして理解されずに叱責を受ける等の二次的障がいを防ぐことにもなり得るため、情報の共有、子ども理解の齟齬をなくすことは保育者の役割のひとつとなる。

表③-1. 保育者が捉えた子どもの姿

カテゴリ	コード
【言葉に関する問題】	場面に応じた言葉が出ない、言葉遣いの荒さ

カテゴリ	コード
【言葉の理解力の乏しさ】	指示が理解できない、言葉が理解できず、行動できない
【言葉の獲得の問題】	発語が少ない、発音が不明瞭、 自分の名前が言えない、発語が喃語
【運動機能の発達の問題】	手先が不器用、運動能力の低下、筋力の低下
【発達過程の問題】	寝返りができない、姿勢を変えることができない 歩行ができない

表③-3 子どもへの支援方法

カテゴリ	コード
【身体のバランスの悪さ】	顔面から転倒、転倒しやすい
【保育内容の工夫】	言葉に触れる機会を増やす、児童文化財の活用 会話がうまれる遊びの工夫
【保育者がモデルを提示】	保育者が正しい言葉・発音を心がける
【言葉による自己理解を深める】	本児の考えや思いを代弁する
【保育者との信頼関係構築】	一対一でのゆっくり話す 聞いてもらえるという安心できる環境をつくる
【関わり方の工夫】	発語を促進する関わり、発達過程を考えた運動の工夫 欲求が満たされるような関わり
【子ども自身が気づく工夫】	言葉遣いについて一緒に考える
【言葉の理解を促す】	非言語コミュニケーションの活用
【自己表現を育む】	自分の思いを伝える方法を伝える 短い受け答えからはじめる
【主体性を育む】	自発的に動きたくなるような環境構成
【運動機能の発達を促す】	体力、筋力を育む遊びの工夫、遊びや働きかけの工夫 発達過程を考えた運動の工夫

表③-4 保護者への支援方法

カテゴリ	コード
【保護者との信頼関係の構築】	保護者との会話を積極的に行う
【情報発信】	子どもの様子を伝える
【共通理解】【子どもの状況を理解】	情報・子どもの思いを共有 家庭での様子を把握する
【提案】	具体的な方法を伝える

④子どもの個別の問題

子どもの発達過程に突出する課題ではなく、その個人の問題として気になる子どもの姿としては、指示待ちが多く自ら動こうとしない【主体性の乏しさ】や表情や動きが乏しい【自己表現の乏しさ】を捉えている。また、多動、攻撃性、感覚過敏等の【気になる行動】は多岐にわたる内容があげられている。保育の中では、視覚的効果、個別スペースの確保等、【保育環境構成の工夫】を行っている。主体性や自発性等、可視化できない事柄であるがゆえに、そのような行動が気質か、情緒的なものか、障がいによるのか、いくつかの要因が考えられるだけに日常の子どもの生活する姿を観察することを大切にしている。また、子どもの遊びを通して発達を促そうとしたり、子どもの自発性をひきだそうとしたりする視点は保育の専門性をいかした支援だといえる。

保護者支援においては、保護者が孤立しないように努め、子どもとの関わり方等を具体的に助言し、保育園と家庭との連携を大切にしている。

表④-1. 保育者が捉えた子どもの姿

カテゴリ	コード
【主体性の乏しさ】	自分で考えて行動しない、指示待ち、積極性に欠ける
【自己表現の乏しさ】	表情の乏しさ、動きの乏しさ、自分でしようとしていない
【自発性の乏しさ】	援助を待つ、大人の関わりを待つ
【活力の乏しさ】	無気力、常にぼんやり、何もしない
【理解力の乏しさ】	理解するまでに時間を要する、内容を理解できない
【耐性の乏しさ】	すぐに諦める、我慢が苦手
【気になる行動】	落ち着きのなさ、集中できない、話が聞けない、奇声、 感覚過敏、視線が合わない ※多動、攻撃性、感覚過敏等、多岐にわたる内容が把握
【自己防衛】	嘘をつく、他児のせいにする
【感情のコントロールが難しい】	泣き叫ぶ、怒りっぽい
【遊びこめない】	遊べない、遊びこめない
【固執性】	譲れない、こだわりが強い、興味の限定
【自己肯定感の乏しさ】	自信のなさ
【規律を守れない】	自己中心的
【子どもの気質】	怒りっぽい
【不安定な子ども】	話していても目が合わない、泣き続ける

表④-3 子どもへの支援方法

カテゴリ	コード
【保育者との信頼関係の構築】	受容、そばについて見守る、スキンシップを図る 同じ保育者がそばにつく、担当制
【個から集団へつなぐ】	周囲に意識が向くように働きかける
【他児への理解を深める】	相手の気持ちを代弁
【他児との関わりを深める支援】	他児と関わる機会を設ける 他児と関わる楽しさを伝える
【子どもが自ら考える保育の工夫】	子どもが考える機会をつくる 子どもの視野を広げる
【その子に応じた関わり】	見守る、居場所がある、共感 個人のペースを大切にする
【保育者がモデルを提示】	行動見本
【保育環境構成の工夫】	要観察、保育者の立ち位置、 視覚的効果、集中できる活動の工夫 発散できる活動の工夫 個別のスペースの確保 五感をとおした自然環境の工夫
【子ども理解を深める】	子どもの背景を理解する 問題と捉えた行動の理由を探る 子どもの気持ちを理解する
【クラス集団をいかした支援】	他児を見本とする、全体への意識づけ
【見通しをもった保育の工夫】	子どもの自信につなげるよう褒める 活動の見通しをもたせる
【長期的な視点をもった支援】	就学を視野にいれる 前年度との比較による成長
【規範意識を育む】	規律
【長期的な視点をもった支援】	就学を視野にいれる 前年度との比較による成長

表④-4.保護者への支援方法

カテゴリ	コード
【親子関係を深める支援】	情報提供、提案
【家庭との連携、信頼関係構築】	信頼関係
【母親を孤立させない支援】	情報発信

カテゴリ	コード
【家庭との共通理解】	子どもの様子を共有する
【助言】	保護者へ褒め方、叱り方の具体的な助言

⑤子どもの集団活動、他児との関係構築における問題

保育園は、同年齢、異年齢の子どもたちが入所しているため、他児との関係構築や集団生活を経験する場となる。そのため、集団活動に遅れる、参加できない【集団生活における問題】として表出する。また、他児との関係構築においては、不安を抱えている子どもや攻撃的などの理由から関係構築がうまくいかない等、同じような子どもの姿にもその要因を多面的に捉えている。保育の中では、個から集団へという過程を大切にし、個の安定、個のペースを保障したうえで集団への意識がむくように配慮されている。

保護者の支援については、家庭の様子を把握し、親子関係を深めるような支援が行われている。

表⑤-1. 保育者が捉えた子どもの姿

カテゴリ	コード
【集団生活における問題】	集団活動に参加できない、集団生活に入るのが苦手 周囲のペースに合わせられない、行動が遅れる
【ルールのある遊びに参加できない】	ルールが理解できない
【他児との関係構築が困難】	言葉よりも手が出る、イライラ
【他児との関係構築に不安】	被害妄想がある、不安感を抱えている
【個別支援を要する】	同じことを注意される

表⑤-3 子どもへの支援方法

カテゴリ	コード
【主体性を育む保育の工夫】	子どもが考えるような言葉かけの工夫
【保育環境構成の工夫】	興味がもてるような工夫、視覚的効果
【保育者の関わりの工夫】	見守る、状況理解できる言葉かけ、声掛けの工夫 個別の関わり、個別から集団へ、集団から個別へ ふれあい遊びをもつ、感動体験、共感体験をもつ
【保育のなかでの体験の工夫】	達成感を味わえるようにする 責任をもたせ自信につなげていく
【集団生活への意識を向ける】	場面状況ができるように伝える
【個別の関わり】	その子に応じた関わり

カテゴリ	コード
【遊びに参加できる工夫】	遊びのルールを工夫
【子ども理解を深める】	子どもの気持ちを受けとめる、子どもの話を聞く
【見通しをもつ保育の工夫】	責任を持たせ、自信につなげる
【子ども同士の関係構築】	意図的に他児と関わる機会をもつ 代弁し、相互理解をうながす、仲介する、他児の理解を促す
【保育者との信頼関係構築】	スキンシップを図る
【保育者がモデルを提示】	具体的な方法を示す、言葉で伝える工夫

表⑤-4 保護者への支援方法

カテゴリ	コード
【情報収集】	家庭での状況を把握
【親子関係を深める支援】	母親と関わる時間を増やしてもらう

4. 保育の専門性をいかした子育て支援

(1) 気になる子どもの姿を捉える保育者の視点

これまでの分析結果から問題発見における保育者の視点を4つに整理することができる。

①保育所の特性をいかした気づき

保育園では、1日の流れがディリープログラムとして設けられ、活動の時間や食事の時間が定められている。また、子どもの発達や興味に添った環境構成、主体的に遊ぶ時間が保障されている。つまり、このような保育環境は、基本的な生活が保障されていない子どもや発達における問題を発見しやすい場となる。子どもの発達の基盤となる基本的な生活を保障することは、不適切な養育の改善や進行予防にもつながるため、重要なことである。

さらに、子ども集団が存在していることも保育所の特性である。そのため、集団生活の中で課題のある子どもたちのその要因を見極め、個々を尊重したうえでの集団生活であることが大切となる。

②子ども理解をいかした視点

子どもの甘えや攻撃的な行動に対して、その要因を推測し、表面化していないニーズや親子関係の問題を捉えている。これは、表面的な子どもの言動ではなく、子どもがなぜそのような行動をとるのかといった保育者の子ども理解をいかした視点だと考える。

③子どもの発達理解の視点

子どもの発達過程や発達課題の知識がいかされている。また、子どもの成長を継続的にみることができるため、長期的な視点、子どもの発達可能性をもって子どもを捉えている。子どもの成長の個人差を踏まえ、なにかができる・できないだけで捉えるのではなく、そのプロセスを丁寧に観察し、子どもの小さな変化を見逃さないというのも保育の専門性のひとつだといえる。

④子どもの主体性を尊重する視点

子どもは自分でできることが喜びであり、自分でできることはさせてあげたいという保育者の思いがある。一方で、子どもが主体的になれない要因を個に限定せず、不安感を抱える環境要因等、その子どもをとりまく環境に留意している。これは、子どもの主体性の育ちの根底には、基本的信頼感が重要であるという保育の視点がいかされている。

(2) 保護者支援について

次に保育をとおした保護者への支援の工夫としては、以下のように整理することができた。

①基本的生活の保障と情緒の安定

基本的生活を保障するため、保育者は【個に応じた関わり】を行い、保育の中で生活リズムを整えている。その支援をとおして変化した子どもの姿を保護者に【情報発信】している。また、生活リズムの改善に向けた【情報提供】や具体的な方法を【提案】し、子どもの基本的生活の保障している。【子どもの自立にかかる養育】は保育園での子どもの様子や子どもの思いを代弁し、年齢に応じた関わりを保護者に伝え、保育者と保護者の連携に努めている。

②状況改善に向けた具体的な視点

子どもの家庭での様子を把握【情報収集】するとともに、保育園での子どもの様子を【情報発信】、子どもの姿を保護者と共有し、【共通理解】に努め、その過程で、保育者と保護者は互いに子どもへの理解を深めていく。子どものできる・できないことだけではなく、どうしたら子どもの困り感が軽減され過ごしていけるのかを考えて、保護者に【助言】している。

③子どもと保護者との関係構築における視点

スキンシップのとり方や子どもの気持ちを代弁することで、【親子関係を深める助言】をしている。また、子どもの姿を共有し、【共通理解】をすることをとおして【保護者との連携や協働関係の構築】に努めている。また、保護者の状況を理解し、保護者を批判せずに

【受容】や【支持】することを意識的に行っている。子育て家庭の課題のひとつともなっている孤立感へも保育者は配慮していることがわかる。

第5章 本研究の成果と課題

本研究では、保育者の子育て支援が日常の保育をとおして行われるという視点に立ち、問題の把握と子ども、保護者への支援方法に着目し、研究を進めてきた。

本研究の成果として、2つあげられる。第1に、これまで重要視されてこなかった保育者の日々の気づきは多岐わたり、保育の専門家としての視点がいかされていることが明らかとなった。とりわけ、子どもの行動から表面化していないニーズや親子関係の問題を把握することができるという視点は、保育者の子ども理解に基づき、子どもの育ちを保障するために欠かすことのできない視点だといえる。第2に、保育の中での保育者の気になる子どもの気づきや子どもへの支援方法の活用が、子どもや保護者だけでなく、保育者と保護者、子どもと保護者の関係が結びついており、保育が子育て支援へと結びついている過程を示すことができた。

本研究の課題としては、カテゴリする過程の中で、主任保育者と子どもの姿に対する捉え方の違いがあった。その捉え方の違いは、子育て支援としての視点と親子関係を深める視点とが浮かび上がってきた。つまり、保育者の視点の多様性ゆえに、自由記述だけでは捉えきれなかった保育者の思いや保育観も考慮した研究が必要となる。また、保育の中で気になる子どもの姿が多岐にわたり、その内容を詳細に捉えきれないこともある。そのため、年齢に応じた発達課題等、焦点をしばった研究も意義あるものとなると考える。

【引用・参考文献】

- (1) 厚生労働省(2008)『保育所保育指針』フレーベル館 p.245
- (2) 柏女霊峰・橋本真紀(2008)『保育者の保護者支援 保育指導の原理と技術』フレーベル館
- (3) 柏女霊峰他(2010年)「児童福祉施設における保育士の保育相談支援(保育指導)技術の体系化にかんする研究(1)ー保育所保育士の技術の把握と施設保育士の保護者支援」
- (4) 小川晶(2011年)「保育所における高学歴・高齢初出産母子に対する支援ー母親と保育者の関係構築を基軸として」『保育学研究』第49巻第1号 pp.51-62
- (5) 今井麻美(2014)「子どもの幼稚園入園に伴い母親が保育者と関わることの意味」『保育学研究』第52号第2号 pp.124-134
- (6) 諏訪きぬ(2014)「子育て支援(総説)」『保育学研究』第52巻第3号 pp.4-8
- (7) 大豆生田(2013)「保育の場における子育て支援の課題」『保育学研究』第51巻第1号 pp.134-142